

第4回：桶ヶ谷沼の自然と管理

静岡県西部、Jリーグのジュビロ磐田で有名な磐田市にある桶ヶ谷沼は、町にも近く、最も開発されやすい位置にありながら、全国でも珍しいトンボの王国が残されている。春から秋まで、いろいろな種類のトンボが観察できるだけでなく、その他の水生動植物や周囲の森林・草原も含めて豊かな生物相が温存されている。

桶ヶ谷沼の植物の特徴は豊富な水生植物にあり、ヨシやマコモに覆われた沼は原生的な景観を醸し出している。カキツバタ群落は分布的にも貴重であり、当地方では絶滅寸前のイヌタヌキモやヒメビシも繁殖している。さらに、環境庁のレッドデータブックの絶滅危惧種として知られているオニバスも水面に葉を広げている。沼の周囲は常緑広葉樹や落葉広葉樹を中心とする樹林で覆われている。沼に湧出する地下水は、こうした自然林にしみ込んだ雨水に由来しており、良好な水質が保たれている。さらに、この林はトンボの餌場であり、強風時の避難場所であり、休息の場所でもある。このように、周囲の森林環境が、沼の生物を守る鍵となっている。

桶ヶ谷沼を代表する動物はなんといってもトンボ類であり、これまでに65種類が確認されている。なかでも注目されるのはベッコウトンボで、環境庁のレッドデータブックでは絶滅危惧種に取り上げられている。また、野鳥の種類が豊富なことでも有名で、これまでに140種類が確認されている。私が訪問した11月には、マガモを中心としたカモの群が水面で羽を休めており、アオサギやカワセミも観察することができた。

沼に人為的な汚水が流れ込まなかったという幸運な自然条件はもちろん、関係者の長期にわたる努力が無かったならば、こうした桶ヶ谷沼の素晴らしい自然は残されて来なかったであろう。県は土地買い上げ、自然環境保全地域や野生動物保護地区としての指定を行い、さらに桶ヶ谷沼保全対策検討委員会を設置し定期的に会合をもっている。そして、地元の自然保護団体が、長い間桶ヶ谷沼の保全のために尽力している。観察路の整備や観察者に対する指導はもちろんのこと、水生植物等に被害を及ぼすザリガニ退治や周辺の自然林の管理といった地道な努力が続けられている。このような団体の活動に直接あるいは間接に関わることによって、自然というものが極めて微妙なバランスの上に成り立っていることを肌で感じる事が出来る。そして、こうした体験こそが自然と人間の共生を考える第一歩につながると思う。



ヨシやマコモに覆われた湿地と周辺の林



水面で羽を休める水鳥達